

平家物語の世界

文責：菅家（54期、執筆時高1）

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

『平家物語』の有名な冒頭の文である。七五調の美しい文体だが、何か哀しいものを感じさせる。

さて、ここでは「平家物語の世界」と題して、『平家物語』とはどんなものが、何が書かれているのか、史実とどう違うのか、紹介していきたいと思う。

「平家物語」とは

13世紀前半に成立したとされる軍記物語。作者は、信濃前司行長であると
する説があるが、定かではない。もともと、盲目の琵琶法師が琵琶をかきなら
しながら語った「語り物」であり、文体は七五調が基本の和漢混交文である。

「延慶本」・「長門本」・「屋代
本」など異本も多く、成立後
も多くの人の手が加えられて
いると考えられる。なお、こ
の中で引用する文は、「覚一本」
による。「覚一本」とは、語り
の名手・明石検校覚一という人
がのこした語り本で、全12
巻と「灌頂の巻」からなる。

覚一本



「平家物語」覚一本（龍谷大学図書館蔵）

「平家物語」の内容

話の中心となるのは、1177(治承元)年の鹿ヶ谷事件(鹿谷の謀議)から1185
(元暦2)年の平家滅亡まで、10年足らずの出来事で、平家の全盛にかけり
が見えはじめてからである。全盛に至るまでのことは、あまり書かれていない。

合戦描写を中心に、仏教説話、後日談、恋愛話や秘話、都の人々の噂話、短
篇小説(のようなもの)など、いろいろな話が、年代を追う『物語』の筋に肉
付けされている。したがって、一部分を代表させて、『平家物語』とはこんな
ものだ、と言うことはできない。

*これ以降、『平家物語』を『物語』と表現することがある。

重要人物とその系図

平 清盛

太政大臣にまで上り詰め、娘・徳子を入内させ、平家全盛の象徴的な人となった。平家一門の総帥。『物語』には、横暴な人物として描かれている。

平 重盛

清盛の嫡子。『物語』には、性格は温厚で、横暴な清盛をよく諫め、また、清盛と後白河法皇とのほざまで苦労した、と書かれている。

平 宗盛

清盛亡き後の平家一門の総帥。『物語』は重盛との比較や壇ノ浦の敗戦などで、その情けなさを語っている。壇ノ浦で捕らえられ、頼朝と対面ののち斬られた。

平 重衡

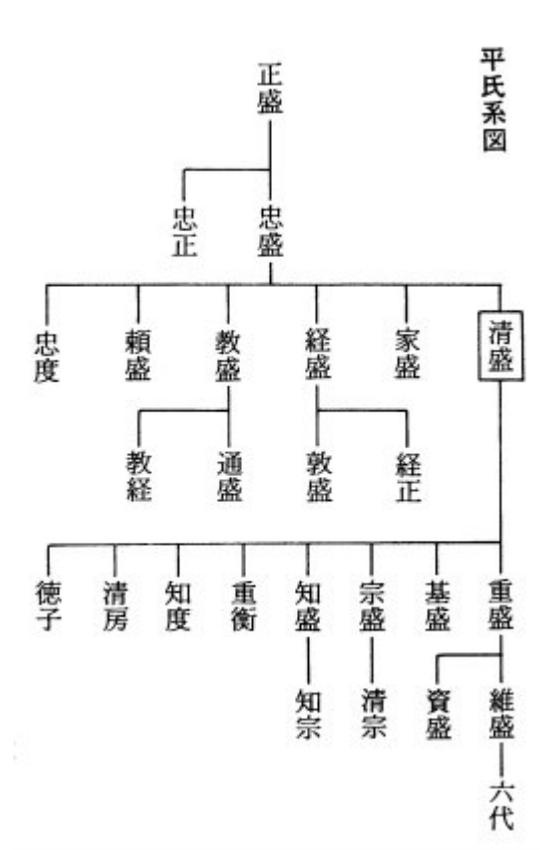
南都焼討ちのときの司令官だったため、一ノ谷で捕らえられると南都へ送られ、斬られた。『物語』では、登場する女性に人気がある。

平 時子

清盛の妻。二位尼として知られる。壇ノ浦の戦いで孫・安徳天皇を抱いて入水。

平 徳子

清盛の娘で安徳天皇の母。建礼門院。壇ノ浦で入水するも引き上げられた。余生は「灌頂の巻」に詳しい。



第4章 個人研究（日本史関連）

ごしらかわほうおう
後白河法皇

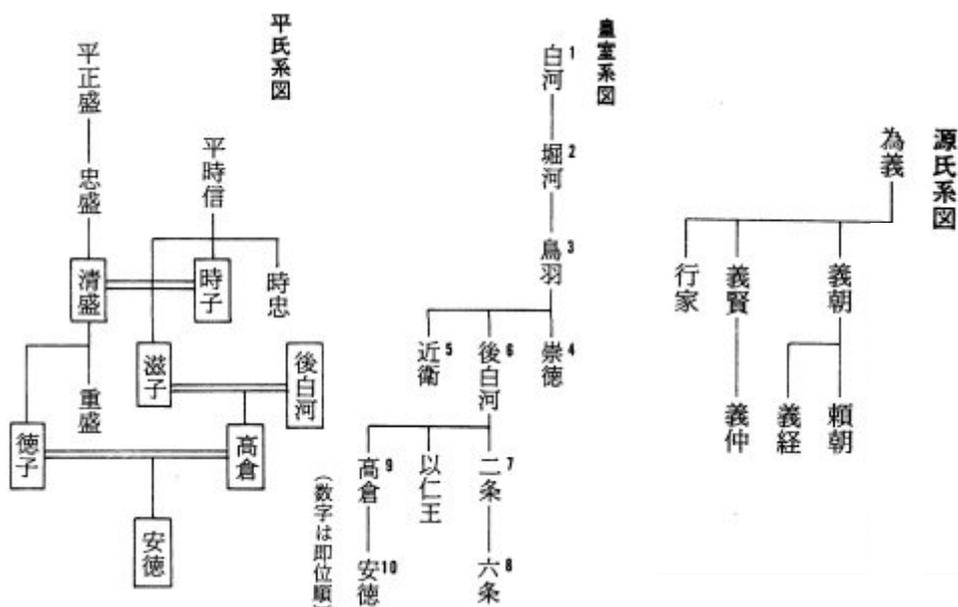
院政を行っていたが、清盛と対立し、鳥羽離宮に幽閉される。それ以前の鹿谷の謀議に加わっていたとも言う。『物語』は権謀術 数に長けた人物として描く。

たかくらのみやもちひとおう
高倉宮以仁王

法皇の息子。弟の高倉天皇が天皇になり、平家にもにらまれていた。自らが天皇になろうと反乱を企てる。結果はこの後すぐ。

あんとくてんのう
安徳天皇

高倉天皇と徳子との間の子。平家都落ちの際、三種の神器とともに瀬戸内海に浮かんだ。壇ノ浦の戦いの後、二位尼に抱かれて入水。生涯は10年にもみたず、薄幸だった。



みなもとのよりまさ
源 頼政

武芸にも和歌にも優れた人物として『物語』に描かれている。70歳代の高齢ながら、以仁王とともに反乱を企てる。

源 頼朝

以仁王の令旨を受けて、配流先の伊豆で挙兵。のち、鎌倉幕府の初代将軍となる。『物語』には、手紙や伝言でよく登場する。

源 義経

平家追討では、目覚しい活躍を見せるが、その後、頼朝と対立し、奥州へ逃れたものの滅ぼされた。『物語』でも後半よく活躍する。

源 義仲

木曾冠者義仲として知られる。北陸道から快進撃を演じて平家を都落ちさせるが、都の人々に嫌われ、頼朝の平家追討軍に先に滅ぼされる。『物語』も野蛮な人物として描く。

さて、今回ここで取り上げる歴史上の事件は、1180年の以仁王の反乱と、1185年の壇ノ浦の戦い。後述する「あらすじ」や事件の推移は、『平家物語』に沿ってゆくの
で、多少史実とは異なる場合もあるが、史実は「検証」のところで確認しようと思う。

あらすじ・1 (『平家物語』巻第一前半～巻第四前半)

隆盛を極める平家、これを打倒すべく鹿谷の謀議が行われるが、密告によりあっけなく露見。首謀者は斬られ、あるいは離島に流される。清盛の悪行を諫めてきた嫡子・重盛が死去すると、清盛は後白河法皇を鳥羽離宮に幽閉するに至る。一方、中央政界に細々と残っていた源氏・頼政は、平家の政権下、不遇の地位にあった法皇の息子・以仁王に皇位につくよう勧め、謀反を起こす。そして、平家追討の令旨がついに、雌伏する全国の源氏に伝えられるのである。

宇治の戦い ~治承4(1180)年5月~

反平家の態勢が整わぬうちにことが露見し、以仁王は園城寺(三井寺)に入る。延暦寺と南都・興福寺へ手紙が送られ、南都から協力の返事を得る。頼政の六波羅夜襲計画は、園城寺内の親平家派の長い評議により夜が明けて失敗、以仁王は興福寺を頼るべく、奈良へ向かうのであるが、しかし――。

宮(以仁王)は宇治と(園城)寺とのあひだにて、六度まで御落馬ありけり。これは去る夜、御寝のならざりしゆゑなりとて(昨夜、お休みになれなかつたからだというので)宇治橋三間ひきはづし、平等院に入れ奉つてしばらく御休息ありけり。

巻第四「橋合戦」の段の書き出しである。続いて、

六波羅(清盛邸周辺)には、

「すはや、宮こそ南都へ落ちさせ給ふなれ。追つけてうち奉れ。」
(それ、宮は南都へお落ちになるというぞ。追いかけてお討ち申せ。)
とて、(中略)都合その勢二万八千余騎、木幡山うちこえて、宇治橋のつめ(たもと)にぞ押し寄せたる。



第4章 個人研究（日本史関連）

ここで、川をはさんでの戦いが始まるのである。『平家物語』はこの戦いの様子を、華やかに、また、ダイナミックに描いている。それでは、しばし無声映画をどうぞ。

（カメラ1 橋全体をうつす）

橋の両方のたもとから、戦闘開始の合図・^{かぶらや} 鏑矢を射る。

（カメラ2 但馬をアップに）

^{ごちいんのたじま} 五智院但馬という宮方の人物が、^{なぎなた} 大長刀をもって橋の上に進み出る。あれを射とれとばかり、平家方の弓の名手たちが矢先をそろえてさんざんに射かけるものの、但馬は少しも驚かない。上の方に飛んでくる矢をくぐり、下の方の矢はとびこえて、正面の矢は長刀で切って落とす。彼の見事さゆえに、敵も味方も見物する。このとき以来、「矢切りの但馬」と呼ばれたのであった。

（カメラ3 明秀をアップに）

次に、^{つついのじょうみょうめいしゅう} 三井寺の僧兵・筒井浄 妙明 秀という人が橋の上に出て、大声で名乗る。名乗った後で、24本持っていた矢をさんざんに射て、12人射殺し11人に傷を負わせて、矢は1本残った。その後、裸足になって橋の骨組みをさらさらと走り渡り、大勢を前に^{たち} 長刀・^{こしがたな} 太刀・腰 刀で奮闘、八方すかさず切りつけた。（この僧兵、討死しないのだから驚きである。）

（カメラ4 橋の上をうつす）

この人に続けとばかり、武士や僧兵があとからあとから走り渡り、斬ったり斬られたり。

（再びカメラ1）

橋の上の戦いは、火をふくほど^{しれつ} 熾烈を極めた。

皆さんは、こんな場面を頭の中で思い描くことができたでしょうか。

その後、平家の軍勢は、^{さみだれ} 五月雨（梅雨）で増水した宇治川を、苦勞しながらも渡ったので、宮方は劣勢となり、以仁王はひそかに平等院を出る。が、平家方にもこれに気付いたものがあり、追いかける。結局、頼政は宇治で自害、以仁王も^{きつ} 木津付近で討たれてしまう。南都の僧兵は、すぐそこまで来ていたのに・・・不運というほかない。

——というように『平家物語』は以仁王の反乱を語っている。では史実はどうなのか、検証してみた。

検証のための史料

『玉葉』・・・・平安末期から鎌倉初期にかけて、摂政・関白を務めた、藤原（九条）兼実かねざねの日記。

『吾妻鏡』あづまががみ・・・・鎌倉時代に成立。1180年、頼朝挙兵のあたりから、1266年までの鎌倉幕府の歴史を記す。

『愚管抄』ぐかんしょう・・・・神武天皇から順徳天皇じえんまでの歴史を記す年代記。延暦寺の学僧で兼実の弟、慈円じえんの著。

このうち『吾妻鏡』は、『平家物語』を参考に行っている可能性が充分考えられるので、記述をそのままは信用できない。

検証・以仁王の反乱

史料の記述から

『玉葉』・・・・以仁王追討に向かったのは、「士卒三百余騎」とあり、さきの引用の「二万八千余騎」には遠く及ばない。また、「十七騎、先ヅ打入、河水敢テ深キコト無シ、遂ニ渡ルヲ得」（川の水はたいして深くもなく、渡ることができた）とあり、増水した川を苦労して渡ったことも記されていない。

『吾妻鏡』・・・・「入道相国（清盛のこと）の子孫、二萬余騎の官兵を率ゐ、宇治の辺に追競いて合戦す。」とあり、「二万八千余騎」に近づいているものの、さきにも述べた理由で、そのままは信用できない。

『愚管抄』・・・・「平家ヲシカケテ攻寄セテ戦ヒケレバ、（中略）頼政ガ勢誠ニスクナシ。大勢ニテ馬イカダニテ宇治川ワタシテケレバ（以下略）」とあり、具体的な軍勢の規模、川の深さについて、言及はない。

また、『平家物語』「橋合戦」の最後に、

三百余騎、一騎も流さず、むかへの岸（対岸）へざつと渡す。

とあり、当時の合戦規模がせいぜい二百～三百騎程度だったということを含ませて考えると、「三百余騎」が実際のところなのであろう。

川の深さについては、上記の『愚管抄』に「馬いかだ」という単語がある。古語辞典によれば、

“川を騎馬で渡るとき、いかだを組むように馬を集め、流れを緩和して渡ること。”とある。よって、宇治川は増水していたことが考えられる。

しかし、『玉葉』には毎日の天気が記されているが、事件当日までの数日間、京都に雨は降っていない。上に抜き出したものと合わせると、“『玉葉』によれば、宇治川の増水はなかったことになる。”とすることができる。

いずれにしても、平家軍は宇治川を渡ったのだ。

反乱の動機

『平家物語』では、頼政が首謀者で、以仁王がそそのかされたことになっているが、実際のところはどうだったのだろうか。

- ・以仁王
 - ・母親が藤原摂関家の出身でない
 - ・高倉天皇の母・建春門院けんしゆんもんいんなど平家に疎外されていたなどの理由により、法皇の息子であるにもかかわらず、親王にもなれないという不遇の30歳であったこと。（だから、“以仁親王”とは呼ばれないのだ。）
- ・頼政
 - 以仁王の反乱発覚直後の追討軍に名前があったことなどから、平家（特に清盛）に信頼され、またうまくいっていた、と考えられる。したがって、頼政が首謀者となる動機がない。（『平家物語』では、頼政の嫡子が宗盛に辱められたことが理由になっている。）

以上の理由により、この反乱は、以仁王が首謀者で、頼政の方が誘われた、ということが考えられるのである。

以仁王の令旨

- ・平家追討ののち、自らが皇位につく、という内容
- ・為義ためよし（系図参照）の末っ子・行家ゆきいえが全国に伝える
- ・頼朝や義仲挙兵の一因となった
 - * 令旨：皇太子などが発する命令書。天皇の場合は宣旨、上皇や法皇の場合は院宣と言う。

この後、事件の波及効果として、全国の源氏が決起した。また、寺院勢力が結集すると、平家政権に対抗しうる勢力となることが実証され、福原遷都せんとや南都焼討ちにつながるのである。（年表参照 p.221）

みやこうつり、みやこがえり

事件ののち、清盛は突然、平安京から福原へ遷都することを発表、数日後には実行にうつす。これは寺社だけでなく貴族からも大反対を受け、結局は半年で遷都かんとすることになる。福原は、日宋貿易の拠点・大輪田泊おおわたのとまりに近い、瀬戸内海に面した地で、平安京よりもずっと狭かった。そもそも何故遷都だったのか。理由としては、寺院勢力をおそれたことが挙げられる。園城寺や興福寺に近く、貴族の勢力も大きい平安京では、僧兵や、法皇とその側近そつきんの貴族による反平家の共同戦線から、平家政権を守ることが困難だったのだろう。

「三井寺炎上」

『平家物語』に「三井寺炎上」という段があるが、これは宇治の戦い直後に置かれている。情勢の変化、局面の展開に緊張を持たせるため、といったもので、史実では遷都後である。

さて、福原遷都が失敗に終わったので、清盛は憂い^{うれ}を断つべく、寺院勢力に対して攻撃を企^{くわだ}てる。第一弾は、以仁王をかくまった園城寺。

夜いくさになつてくらははくらし、官軍寺にせめ入りて火をはなつ。
(夜戦になって、暗さの中を平家の軍勢は三井寺に攻め入って、火を放った。)

この火がたちまち燃え広がって、園城寺の堂宇を多数、焼き払ってしまった。史料によれば、1180年12月10日のことである。

南都焼討ち

寺院勢力への攻撃第二弾は、以仁王を迎えに来た興福寺。重衡率いる軍勢は、興福寺の僧兵と激しく戦い、そのうちこちらも夜戦になった。明るくするために、あたりの民家に火をつけた(当時の常識らしい、ひどい話である)が最後、12月の激しい風にあおられて、燃え広がった。

ほのほ(炎)の中にやけ死ぬる人数を記いたりすれば、大仏殿の二階には千七百余^{やましな}人、山階寺(興福寺)には八百余人、(中略)つづさに(細かく)記いたりすれば、三千五百余人なり。

『物語』はこのように、悲惨な状況を叙述している。貴族にとっては、大仏が焼けたことのほうがショックなので、人が大勢死んだ(誇張かもしれないが)ということが都に伝わったのか、あるいは貴族たちが認識していたのか、という点については不明。

奈良の文化財(東大寺や興福寺など)の歴史解説は、必ずこの南都焼討ちのことについて触れている。東大寺の大仏殿を例にあげれば、この立派な建物は、南都焼討ちと戦国時代に二度焼けたのち再建されたもので、創建当初と比べると3分の2の幅になってしまったという。奈良にとって南都焼討ちは、相当な大事件だったのである。

第4章 個人研究（日本史関連）

『平家物語』において、園城寺攻撃が巻第四、南都焼討ちは巻第五の、それぞれ最後に記述されているが、これは詠嘆性を持たせたかったからかも知れない。

あさましかりつる年も暮れ、治承も五年になりにけり。

とは、巻第五の結びのことばである。

時は変わって、1184（寿永3）年の一ノ谷の戦いから「あらすじ・2」を書くことにする。ここまでの出来事は、「関連年表」で確認していただきたい。

あらすじ・2

都落ちこそしたものの、瀬戸内海においては勢力のある平家。都の奪還を目指し、一ノ谷に城郭を構えるが、頼朝の弟・範頼のりよりの攻勢、義経の奇襲で敗北、多くの武将が討たれ、一門は四国・屋島の地へ渡った。翌1185年、義経は暴風雨をつけて屋島を奇襲。平家の軍勢は、源氏勢を大軍と見誤り、海上へ逃れる。こうして最後の合戦へ突き進んでゆく。

那須与一なすのよいち

開戦前から結果は判明している。赤い鶏と白い鶏（平家は赤旗、源氏は白旗と言われるので）を勝負させたら、白い鶏が勝ったとか、平家は引島（退く）について源氏は追津（追う）についたとか。『平家物語』がこの事件よりも後に作られたため、結果を暗示させるようなものになっている。「那須与一」の話もその一例ではないかと思う。それでは、屋島の戦いの後の、緊張の一瞬をどうぞ。

海上に逃れた平家と屋島の源氏との間で合戦があったが、日没により義経は攻撃をやめる。すると、沖の方から、立派に飾った小舟が一艘漕ぎ寄せてきて、岸から80メートル前後のところまで舟を横に向ける。その中から、とても美しい女の人が、金色の日をあしらった扇を持って出てきて、手招きをする。「射よ」という意味にとった義経は、弓の名手で当時20歳くらいだった那須与一むねたか宗高を呼び出して射させるのである。

午後6時ごろ、北風は強く波も高かったので、目を閉じて祈る、「どうかあの扇の真中を射させてください。」そして目を開けると、風も少し弱まり、扇も射やすそうになった。与一、矢をとってつがえ、引いて、ひょうと放つ。矢は扇のかなめ要ぎわ3センチばかりのところをふっと射きった。扇は空中に舞い上がり、春風に吹かれて、さっと海へ散った。

——沖では平家が船端をたたいて、陸では源氏がえびら箆（矢を入れておくもの）をたたいて、歓声をあげた。

『平家物語』は「那須与一」の段でこの話を、現代語には訳し難い美しい表現で描いている。——次はいよいよ最後の合戦。

壇ノ浦の戦い ～最終決戦～

元暦二年三月廿四日の卯の刻に、門司、赤間の関にて、源平矢合とぞさだめける。（1185年3月24日午前6時ごろ、源平開戦と決まった。）

さて、源平両軍の陣の間は、海上3キロほどあった。関門海峡は潮の流れが速いので、源氏の舟は潮の流れに向かって押し流され、平家の舟は潮に乗って進み出た。はじめのうち源氏の勝利は危うく思われたが、四国の有力な軍勢が寝返ったので・・・

さる程に、四国・鎮西のちんぜい兵共、みな平家を背いて源氏につく。いままでしたがひついたりし（従いついていた）者共も、君（主君）にむかつて弓をひき、主に対して太刀をぬく。かの岸につかん（舟をつけよう）とすれば、浪たかくしてかなひがたし（かなわない）。このみぎは（渚・岸）に寄らん（舟を寄せよう）とすれば、敵矢先をそろへてまちかけたり。源平の国あらそひ、今日をかぎりとぞ見えたりける（今日が最後と思われた）。

この後、平家に勝ち目はないと思った二位尼は、泣きながら安徳天皇を抱いて、

「波の下にも都のさぶらふぞ」（波の下にも都がございます）

ということばをのこして入水した。さらに、

第4章 個人研究（日本史関連）

悲しき哉、無常の春の風、忽ちに花の御すがたをちらし、なさけなきかな、分段のあらし波、玉体を沈め奉る。(悲しいことに、変化し続ける春の風は、たちまち帝の花のようなお姿を散らし、なさけないことに、六道を輪廻する生死の荒波は、天子のおからだをお沈め申し上げる。)

このように『平家物語』は、仏教用語を使いながら、美しく、悲しみを込めて、安徳天皇の入水を語っている。

検証・壇ノ浦の戦い

史料の記述から

- 『玉葉』・・・ 4月4日の条に「去ル三月廿四日午刻、長門国に於テ合戦ス、海上に於テ合戦ス」とある。(長門国：山口県西部)
- 『吾妻鏡』・・・ 3月24日の条、「長門の国赤間関壇ノ浦に於て源平相遭ひ、各三町を隔てて舟船を漕ぎ向かふ」(三町：約10キロメートル)
- 『愚管抄』・・・ 「元暦二年三月廿四日二船イクサノ支度(中略)長門ノ門司、壇ノ浦トイフ所ニテ船ノイクサシテ(以下略)」

三つの史料に共通して「三月廿四日」、「長門国壇ノ浦」という単語があることから、『平家物語』の記述は正しいと考えられる。このように、『平家物語』は誇張表現を交えながらも、「歴史」を書いたのであり、「小説」ではない。今日の歴史書は、客観性や正確性が大事にされているが、この『平家物語』は鎌倉時代に成立したものであるため、その点においては仕方がないと言えないだろうか。

壇ノ浦の前に勝負は決していた！？

屋島の戦いで源氏に敗れたことは、平家にとって大きな痛手であった。瀬戸内における最後の拠点を使い果たし、今まで辛うじて従いついてきた四国の有力豪族や、源氏につかせてはならない水軍などは、みな平家から離れてしまったのである。(当時、寝返りという行為はごくあたりまえで、生きのびるためには必要なことだった。)

——といったように、こんな点では壇ノ浦の戦いは必要なかったのではないかと、という疑問も浮かんでくるが、義経はあくまでも令旨・院宣どおり、「平家追討」を目指したのである。

* 院宣：平家都落ちのあと、後白河法皇から「平家追討」の命令が出ている。

潮の流れと壇ノ浦の海戦

屋島の戦いに敗れた平家は、関門海峡の小島に陣を構えていた。本州や九州には、敵がいて上陸できなかったのである。平家は伝統的に海上戦には強く、起死回生の希望をつないでいた。それゆえに、海上戦を苦手とする東国勢を率いる義経は、一ヶ月近くもかけて慎重に準備をしたのだろう。

* 東国武士は海上戦が苦手——瀬戸内海など合戦に海が関わることの多い西国と、陸ばかりの東国では、合戦のやり方も違ったようだ。赤壁の戦いのキーワード・「南船北馬」ではなく、日本は「西船東馬」であった。

合戦前日、九州沿岸への上陸を阻む範頼軍と、瀬戸内海を西進してきた義経軍によって、平家は完全に包囲された。義経は、平家の陣から10キロばかり東側に、陣をとった。

明るる元暦2年3月24日、 壇ノ浦の戦い ~ 源平最終決戦 ~

この合戦には、四国の有力豪族の寝返り、有力水軍の源氏への統合、義経の（当時としては常識破りの）ひらめき——非戦闘員である船の漕ぎ手を射倒すこと——、それに忘れてはならない範頼の九州での働きなどが大きく影響しているが、ここでは、より影響力の大きい、関門海峡の潮の流れに注目してみることにする。



第4章 個人研究（日本史関連）

『義経伝』によれば、

（時刻）		（潮流）
午前6時ごろ	開戦	ピークを過ぎた西流（西・瀬戸内海へ流れる）
8時30分ごろ		東・日本海へ逆流をはじめ
11時すぎ		東流最大（8ノット・時速15キロほど）
		（このころまでは、平家軍が潮の流れに乗り、優勢）
午後3時ごろ		西へ逆流をはじめ
5時45分ごろ		西流最大（8ノット）に達する
		（このころまでに、地元豪族はほとんど源氏につく。源氏優勢）

『平家物語の旅』によると、

正午ごろ	開戦	東流はピーク
午後2時すぎ		西へ逆流をはじめ

とあって、はじめは平家優勢、のち源氏が逆転する。

また、陰暦元暦2年3月24日（陽暦1185年5月2日）の東流の最大は1.4ノット（時速3キロ弱）、西流の最大は0.9ノット（時速2キロ弱）という弱いものだったという情報もある。ただし、人間が漕ぐには少し影響がありそうである。

ほかに、正午ごろ潮流が変わったとか、午後3時ごろ西流が最大になった、という説もある。

いずれにしても、緒戦は平家が優勢だったが、潮の流れが変わって源氏が優勢になった、ということは確かなようである。

この後、能登守教経のとのかみのりつねの奮戦と壮絶な最期の場面や義経の八双跳びといったハイライトが語られ、三種の神器が都に帰ってくる話や、壇ノ浦で生け捕られた宗盛と一ノ谷で生け捕られていた重衡が処刑された話に移って、『平家物語』巻第十一は終わる。巻第十二には、頼朝と義経の対立や、清盛の曾孫・六代ろくだいの話が書かれている。結局、六代も斬られて、

それよりしてこそ、平家の子孫は、ながくたえにけれ。

（永久に絶え果ててしまった。）

『平家物語』最後の一文である。

『平家物語』へのいざない

さて、ここまで、源平合戦のはじめとおわりを取り上げて見てきましたが、いかがでしたでしょうか。肉のついていない骨のような話で、面白くなかったかもしれません。ここまで飽きずに読んでくださった方に、ただただ感謝を申し上げるのみであります。

はじめの方にも書きましたが、『平家物語』はいろいろな話によって構成されているので、一部分を持って代表させることはできません。(そうして書いてきたじゃないか。)今回取り上げた話のほかにも、木曾義仲や宇治川の先陣争いの話、「敦盛の最期」や「弓流し」といった有名な場面、涙を誘う女性の悲話など、『平家物語』にはたくさんのお話が載っています。したがって、全巻通して読んでみないと、『平家物語』はよくわからない、あるいは、ほかの部分の味わえないのです。

また、「七五調が基本の・・・」といったように、美しく、リズムカルな文章は、黙読では知らぬ間に通り過ぎてしまいます。音読——古典は仮名遣いも違うし堅苦しいところもあるけれど——をしてみると、『平家物語』がよりいっそうすばらしいものに見えるのではないのでしょうか。

以上で本稿を終わります。最後までおつきあいいただき、本当にありがとうございました。

